

外国語のススメ（教員コラム） 平成22年度バックナンバー

※執筆者の所属・職名は掲載当時のものです。

【第15回】 Are you in control, or in the control?

ネットワーク情報学部准教授 神白 哲史（英語担当）



昨今、携帯電話の進歩が目覚ましい。携帯電話がありふれた存在として我々の日常に組み込まれてから10年くらいではないかと思う。以前は「電話する」、「メールを交換する」くらいの用途に限定された手のひらサイズの無線電話であり、主たる用途はコミュニケーションであったように思うが、もはや、その用途はコミュニケーションにとどまらず、手のひらサイズのコンピューターを持ち歩いているようなものである。

メモリ1メガ1万円という時代から比べると、最近の1テラだの、1ペタだのいう大容量メモリや、1kgを切るような軽いノート型パソコン、通信速度が100MBを超える高速通信網など、「便利な世の中になったものだ」と考えることは確かに多く、それらの技術革新によって我々の生活は生産性を増しているように思える。「パソコンは玄人のもの」であった時代は終わりを告げ、一般庶民でもその創造性の恩恵にあずかることが出来るようになり、大いに助かっている。私個人も、論文執筆、統計処理、教材作成（文書・画像・音声処理に関して）など、活用している部分は多い。250ページに亘る博士論文を、手書き、もしくはタイプライターでやっていたという時代に生まれなくて、本当に良かったと思う。

しかし、そんな私であっても、iPhoneに代表されるsmartphonesの隆盛は、少し行き過ぎの感を持って受け止められている。「便利になり過ぎているのではないか」という懸念を禁じ得ない。

iPhoneは確かに世界中で良く売れたようだ（全世界で7000万台以上売れているそうだ）。特に日本で爆発的に売れたという。確かに、電車で乗ればiPhoneをいじっている人を老若男女問わずに見かけるし、大学でも多くの学生達が持っている。「そんなに良いものなのか？」と疑問に思い、学生に「何のために使うのか？」という質問をすると、「主にTwitterです」という答えが返って来ることが多いように思う。「先生もiPhoneにした方が良いですよ」などと学生から良く言われるが、iPhoneに代表されるsmartphonesの利点がいまだに私にはピンとこない。重い、バッテリーがすぐ切れる、など、悪い点は明確に理解できる。「学習に使える」ことを謳ってはいるが、その効率性が他の学習方法に比較して高いとも確認されてはいない。

スケジュール管理が出来ることなど、便利そうに思える点は確かにある。しかし、その他の音楽・映像等の娯楽の部分が多すぎて、自分にとっては必要のない無駄な機能のオンパレードであり、それらを取捨選択できないところに疑念を持たざるを得ない。多機能であることで、リスクの分散化が出来ず、それを失った時のダメージが大きいということも考えられる。



どうも、ここまで市場を席巻するのは、“smartphone”という名前でもって、「使っている人はsmart（賢い、洒落た）なのだ」と誤解している人も多いのではないかと思う。しかし、実際には電話機がsmart（気の利いた・精密で高感度な）なだけである。決して、使っている人がsmartなわけではない。使用者が電話機よりも賢くなければ、いつの間にか主導権を奪われてしまい、傀儡人生などと呼ばれる日も遠くないかもしれない。

Smartphonesは憎たらしいほどにsmartであるように思う。事実、smartphonesに翻弄されている学生は少なくないように見える。一日中Twitterにつぶやき続けずにはいられない人がいる一方で、高機能過ぎて使っていない機能の方が多い人も多いのではないだろうか。

私は、自身がsmartphonesに翻弄されないという自信を持てずにいるので、未だに安価でprimitiveなPHSを使用している。さりとて日常に不便を感じていないので、これ以上何の機能が必要なのか自問しつつ、技術革新を横目で眺めるだけである。いつの日か、自分が十分に賢くなり、smartphonesと対等に付き合うことができる日がやって来ることを願いたい。

* 「iPhone」は、米国Apple Inc.の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
* 「Twitter」は、Twitter, Inc.の米国およびその他の国における登録商標です。

(2011.01.15)

今でこそ外国人向けのサポートが充実しているようだけれど、私が文学研究のためアイルランドの大学に留学した2001年のその昔、日本からやってきた学生が入れるようなon campusの寮は皆無に等しかったといつてよい。入学許可が下りたのが確か青葉茂れる新緑のころ、大学からの書類に住居情報が殆どないので、二度三度とメールで催促した挙句、ようやく一枚のファックスが送られてきたのだが、そこに記してある入寮申請の締切日はすでに二ヶ月の昔だった。大変な時差である。

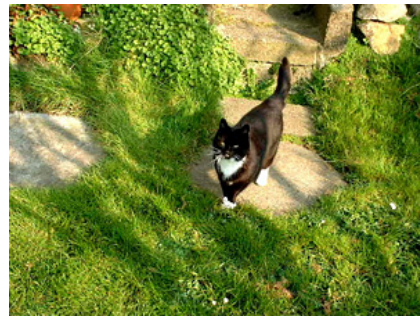
現地の学生も殆どが街中に住むというので、2週間に渡る家探しの末、賄いつきの下宿、いわゆるホームステイに落ち着いた。アイルランドではこれをdigsと言って、制約が多いために地元の学生には人気がない。私も5ヶ月暮らした挙句、ホストファミリーと大喧嘩して裏口から叩き出された。人生であれほど流暢に英語が口から流れ出たことはついぞ無く、あれほど悪口雑言を並べ立てた経験も他に無い。もっとも向こうは私の30倍ほど罵ったので負けは負けであろう。



荷物と一緒に放り出された私を憐れんで、在外研究でダブリンに滞在していた日本人の先生が車を出してくださり、どうにか友人の家に転がり込んだ。悔し涙にしながら道中の車窓から見たダブリン湾は北の海の寒々しい青緑色を湛えてなめらかだった。「“The snotgreen sea”ですね」運転席の先生が呟いた。アイルランドの誇る作家James Joyceの小説Ulysses冒頭部で、祖国の呪縛に囚われて鬱屈している主人公Stephen Dedalusが、皮肉をこめてアイルランドの海を評した言葉。先生はジョイス研究の方であった。おかげで私は今に至るまでジョイス研究者に足を向けて寝られない。100年の昔から変わらない海の色を見てるとなぜだか少し気持ちが落ち着いた。どんな緑色だか想像がつかない方はsnotの意味を辞書で引いてみるのがよしい。

緊急避難した先の家にはその後1年半暮らした。ダブリンでの生活の半分はこの家で過ごしたことになる。現地の企業で働いている同年輩

の日本人女性と、年齢は倍ほどの大柄なアイルランド人女性が同居人で、さらに一匹の猫がいた。私が猫の名をきくと、ジェーンという同居人は、「さあな、あれは大家の猫だから。うちではStupid Catと呼んでるよ」と答えた。大家というのは変わり者の大学教授で、母親が晩年住んでいたその家を、猫ぐるみ一切の設えを変えてくれるなという条件で格安に貸しているのだという。「いまだきこんな古めかしい部屋なんぞダブリン中探したってどこにもない」とジェーンは始終愚痴っていた。ケルトの虎といわれた好景気に沸いていた当時のダブリンで、確かにその家はいかににも古色蒼然としていた。トイレが壊れたとき修理に来たplumber(配管工)は、「おたくのトイレはGeorgianものだね!」と仰天したという。(Georgianすなわちジョージ王朝時代とはイギリス王ジョージ1世から4世の治世時代、1714年から1830年の間を指す) ティーカップから絨毯に至るまで何一つ変えてはいけないというその家のまるごとが、死んだ母親を祭る聖なる神殿だった。私たちはそこで、祭壇を守る年を食った巫女のようにひっそりと暮らした。不可抗力で古いティーカップが割れれば密かに快哉を叫び、小さな庭に実るリンゴの実を律儀に収穫した。日本人女性は料理の天才で、死んだ老女の焼き型を使って見事なapple tartを焼いた。庭にはわずかながらバラも植えられていて、昔の品種だから香がつよいのだとジェーンは言った。猫の発情期にはStupid Catの尿と花々の芳香が回りまわって強烈なおいがたちこめた。



ホストファミリーとの大喧嘩のトラウマから最初のうち神経質になっていた私を、ジェーンはそれなりに気遣っていたらしい。一緒に台所に立っていたとき、鍋を焦がした彼女が大声で“Shite!”と叫んだことがある。アイルランド式の“Shit!”である。(ちなみにアイルランド式だとFuck!はFeck!となる。これは単なる詈りではなくてminced oath、婉曲的な罵り表現で、Fuckよりは上品なのだそう。) 思わず知らず体をこわばらせた私を見て、ジェーンはにやりと笑い、今度は歌うような節をつけて“Shite and onions!”と怒鳴ってみせた。「shiteは汚い言葉だが、こっちなら使ってもいいだろう。由緒正しい言い回しだぞ、なにしろUlyssesにも出てくるんだから!」長年ジェーンの冗談だと思っていたけれどこれは本当で、Ulysses第八挿話でStephenの父親が口にする。注釈によればtripe and onions(臓物と玉ねぎのような下らぬ物、の意味)を彼流に改変した罵り語であるらしい。snotがでてきたりshiteがでてきたり、Ulyssesも大変な小説なのだ。

だ。

アイルランドを去ったのはそれから3年の後である。留学生活は結局大した実も結ばず、私は日本に戻って研究を続けることにした。3年もいたのならさぞかし英語が話せるようになったでしょうと誰に会っても言われるが、さっぱりそんなことはない。ただ、ジョイスの小説は今でもぼちぼち読み、 “Shite!”の使い方は実に板についた。

(2010.11.15)

私はいままでずっと中国語を勉強してきたが、ずいぶん以前からフランス語も勉強したいと思っていた。その一つのきっかけは、芥川龍之介の「湖南の扇」という小説を読んだ時のことである。芥川は中国の湖南省の町で北京の女子に出会い、彼女の発話する北京語のRの発音がフランス語のように美しい、と書いている。それで私も関心が湧いたのである。湖南の発音は北京とかなり違ってスカスカした感じである。そのなかで歯切れのよい北京語を耳にしたから、芥川にはよけいそう感じられたのだろう。

そこでフランス語をなんとかしようと、一度はアテネ・フランセに通ったこともあるが、お金と時間を無駄にただけだった。かなり後年になってやっとフランス語を勉強できる機会がきた。パリに長期在外に出かけることになったのである。



パリの生活でフランス語を聴いて、芥川が書いていた北京語の美しいRの発音とは、たぶん北京語のHの発音なのだろうと気がついた。私のフランスの友人にArraultという人がいて、彼の名前は日本ではアローと呼ばれているが、パリにいる中国系の友人が彼の名前を北京語なまりで発音するとアローに聞こえる。その中国系の友人にフランス語のRの発音はどうやるんだ、ときいたら、北京語のHと同じでよい、といていた。このように私は、フランス語を中国語（北京語）の側からみる、あるいは中国語をフランス語の側からみる、ということを狙っているのである。



私が参加していたパリの大学の授業は、基本的にはフランス語だが、受講生には中国人が多いから中国語もしばしば使われた。オリエント研究図書館というところで本を探したが、そこには数名の中国系の研究員がいてレファレンスはすべて中国語OK、館長はフランス人だが東洋史専攻なので中国語OK。私のアパートはパリの13区、中国系の人々の居住区で、買い物も中国語OK。

ある時、私は高熱を発して咳が止まらなくなったため、くすりを買おうと思ったが、薬局で薬品のディテールをフランス語で話せない。結局、中国語を話せる人はいませんか、と質問したら、なかから中国系の男子が出てきて、彼と中国語で話してくすりを買えた。彼の中国語は少々たよりない。聞いてみたら、彼は両親が台湾からの移民で、彼自身はパリ生まれなのだそう。ついでに中国語OKのドクターの電話番号も聞いておいた。

パリのまんなかにブランタンというデパートがあり、高級品をたくさん売っている。私はいつも見物に行く。気がつくと、エスカレータの左右の壁にはあってある商品広告がすべて中国語になっていた。パリのまんなかに漢字の列！なんだか妙な気分だ。でも私としてはフランス語よりも楽なのでラッキーである。

ある日、日本の偉い先生の講演があるというので出かけてみた。席がいっぱいで、たまたま私の尊敬するRobert先生のとなりしかあいていなかった。ロベール先生は日本中世の仏教を勉強している人である。講演が始まると、その日本からきた先生は英語で話しはじめた。私の英語力が乏しいせい、残念ながらほとんど聞き取れなかった。私が聞き取れないで茫然としていると、となりにいるロベール先生が私の顔をのぞきこんで、小声で「完全聽不懂」（まったく聞き取れません）と中国語でささやいた。私は思わずふきだしそうになってしまった。ロベール先生は、英語やフランス語や日本語でこの話題を話す他の人にわかってしまうから、その場では私としか通じない中国語で話したわけである。彼はそのあと日本に招かれ、私の友人たちに出会ったらいい。土屋はフランス語で苦労しているんじゃないか、と聞かれ、ムッシュ・ツチヤは中国語ばかりしゃべっている、と答えたそう。ちなみにロベール先生の名前は中国語で羅貝爾（ルオベイアル）という発音だが、北京語なまりで「ホベール」と発音した方がよく通じるのではないかという気がしている。



(2010.10.22)

外国語の勉強を始めると、すぐに母語（日本語）との違いに気付きます。まず、発音が違います。そして、単語が違います。さらには、文の作り方が違ってきます。文化的な違いが反映されたりもします。

私たちは奇異なるものに接する時、どうしても違いばかりに目をやりがちです。ここが違う、あそこが違う、って。でも、ちょっと考えてみてください。外国語だって、所詮、人間のコトバです。もし、あなたが日本ではなく、フィリピンのマニラで生まれ育ったとしたら、「リンダは何を買ったの。」ではなく、Ano ang binili ni Linda? という文が自然と口をついて出てくはず。私たちに生まれながらにして、どんなコトバも身につけられる潜在能力が備わっているのです。そうであれば、全てのコトバに共通の特徴が何かあってもいいはずでしょう。

簡単な例として、英語と日本語を比較してみましょう。

英語で、lightとhouseとkeeperという語を組み合わせて、1つの表現を作り出す場合、2通りのやり方があります。1つは、lightとhouseをくっつけてlighthouse（灯台）を作り、その後、lighthouseにkeeperをくっつけてlighthouse keeper（灯台守）を作るというもの。そして、もう1つが、最初にhouseとkeeperをくっつけてhousekeeper（家政婦）を作り、できた語にlightを加えて、light housekeeper（手軽な家事をする家政婦）を作るというもの。



lighthouse *1



housekeeper *2

どこを最初にくっつけるのが大事なんですね。

注目してもらいたいのは、2つの表現の発音です（文字を持たないコトバが存在することからもわかるとおり、文字はあくまで補助的なものです）。一番強く読む場所が違ってきます。これは、英語の一般的な発音の規則によるもので、名詞と名詞をくっつけてより大きな名詞を作るとき、上記のような場合には、左側の名詞に強勢を置くからです。「灯台守」では、まず、light + house = lighthouseとなり、その後、右側にkeeperを足しても左側にある強勢に影響を与えません（lighthouse + keeper = lighthouse keeper）。「家政婦」では、まず、house + keeper = housekeeperとなり、その後、左側にlightを足しますが、このlightは「光」という名詞では意味が通じませんので、「仕事量の少ない」という形容詞なのです。そうすると、強勢の位置には影響を与えず、light + housekeeper = light housekeeperとなるわけです。同じようなことが、日本語でも起こるのでしょうか。

日本語では、名詞と名詞をくっつけてより大きな名詞を作るとき、右側の語の最初が「濁る」場合があります。例えば、花（はな）と 暦（こよみ）をくっつけると、花暦（はなごよみ）となり、「こ」が「ご」に変わります。ただし、右側の語が既に「濁る」発音を含んでいるときは、「濁りの規則」が適用されません（少数の例外あり）。ですから、花（はな）と 言葉（ことば）をくっつけても、右側には「ば」という「濁る」発音がありますから、花言葉（はなことば）となり、「はなごことば」とはなりません。

今度は、「桜」「鯛」「寿司」という3つの名詞を使ってより大きな表現を作ってみましょう。英語の場合と同じで、可能性は2つ。1つめは、「桜」と「鯛」を先にくっつけて、その後に「寿司」を足すというもの。2つめは、「鯛」と「寿司」を先にくっつけて、その後に「桜」を足すというもの。前者では、桜（さくら）と 鯛（たい）を結びつけると、「濁りの規則」が適用されて、桜鯛（さくらだい）（桜の咲く頃に獲れる真鯛）ができます。さらに、寿司（すし）を右側に足すと、もう1度「濁りの規則」が適用されて、桜鯛寿司（さくらだいうし）ができます。完成した語の意味は、「桜鯛を食材として使った寿司」です。後者の可能性ではどうでしょう。まず、鯛（たい）と寿司（すし）を結びつけると、「濁りの規則」が適用されて鯛寿司（たいうし）ができます。そして、左側に桜（さくら）を足しますが、この場合、既に右側の語が「濁る」発音を含んでいるので、規則は適用されず、桜鯛寿司（さくらたいうし）となります。その意味は、「桜の花や葉を使った桜寿司の一種で、鯛も食材として使われているもの」です（実際、川魚である岩魚(いわな)を使った桜寿司もあるようです）。



桜鯛



桜寿司

本物の「さくらだいうし」が食べられるのは、桜の咲く頃だけですが、「さくらたいうし」は、年中食べられるだけでなく（桜の花や葉は塩漬けにします）、食材の鯛は、真鯛でなくても、黒鯛でも、石鯛でも構いません。



黒鯛 *3



石鯛 *4

日本語の例が上でみた英語の例とよく似ていることに気付くでしょう。「強勢の規則」と「濁りの規則」という違いはありますが、どちらにおいても、「部品」の組み立て方が、発音に反映され、意味の違いが生まれるのです。

外国語の勉強を続けていると、「なあって、日本語と似てるじゃん。」と思う瞬間が必ずあります。上の例は、語と語をくっつけてより大きな表現を作るものですが、なにも類似性は、「文法」に限った話ではありません。英語の例を続けると、Susan and her boyfriend will tie the knot next month. という文はどんな意味でしょう。「スーザンは彼氏と来月結婚する」という

意味で、tie the knotの文字通りの意味は、「結び目を作る」です。日本語の、「縁結び」、「結納」、「結婚」といった表現とよく似ているでしょう。このように、「決まり文句」などにおいても、共通点が見え隠れするのです。

外国語をある一定の水準まで身につけようとすると、膨大な時間が（普通は）かかり、実に厄介です。その際に、コトバの共通点を見つけてやろうという意識を持って学んでみてはいかがでしょう。時として辛い勉強が、楽しくなるかもしれませんよ。行き詰ったら、次の呪文を（相田みつを風に）唱えてみてください。人間のコトバだもの。

1. Photo by Andrew Bossi. Permission: Dual-licensed under the GFDL and CC-BY-SA-2.5, 2.0, and 1.0. http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/3/39/NJ_LBI_Lighthouse_06.JPG/450px-NJ_LBI_Lighthouse_06.JPGより転載。
2. Painting by William Thomas Smedley (1858-1920). Permission: This image is in the public domain because its copyright has expired. http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/21/Smedley_maid_illustration_1906.jpgより転載。
3. Photo by Vineyard. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation. http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/5/51/Black_seabream%28side.JPGより転載。
4. Photo by E-190. Permission is granted to copy, distribute and/or modify this document under the terms of the GNU Free Documentation License, Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation. <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/f3/Shimadai.jpg>より転載。

(2010.09.15)

【第11回】 語学力 +α (プラスアルファ)

文学部准教授 井上 幸孝 (スペイン語担当)



「語学力」というと皆さんは何を思い浮かべますか。きっと多くの人は文法力や語彙力を思い浮かべるかもしれません。あるいは、発音の美しさや流暢さを最初に連想する人もいるでしょう。確かに、外国語で他人に何かを伝えようと思ったら、どちらも欠かせない大事な要素です。貧弱な語彙力しかなければそれに見合った程度のレベルの会話しかできませんし、文法的に正しい文が作れなかったなら、本当に伝えたいことを的確に言えません。また、そうして思いついた単語や文章をせめて通じるレベルでちゃんと発音できなければ、相手は理解してくれません。でもそれだけでいいかという、そうではないと常々感じています。スペイン語を話していて強く感じるのはいや、スペイン語だからこそ特に強く感じるのかもしれませんが）、そこに「+α (プラスアルファ)」されるノン＝

バーバル（非言語的）な部分です。

具体的には、ジェスチャー、いわゆる身振り手振りで。会話をしている時のジェスチャーが日本語話者とスペイン語話者の間では大きく違います。うっかりこちらが何らかの日本語的ジェスチャーをすれば、相手は誤解するかもしれません。例えば、「私」と言いたくて鼻の頭を人差し指で指したら、相手は「鼻のてっぺんに何かついてるの？」と怪訝な顔を示すでしょう。挨拶しようと思ってうっかり頭を下げた時には、足元に何かあるのかと思われてしまうかもしれません。

実際、あるメキシコ人の友人が日本へ来た時のコメントなのですが、「日本人は会話をする時に手は全然動かしてなくて、なのに首から上だけは小刻みに動いていて、慣れるまでとても奇妙な光景だった」のだそうです。確かにメキシコで会話をしている人たちの身体の動きを観察していると、腕や手指が非常に大きく動いているのがわかります。

ちなみに、スペイン語ジェスチャーのヒントはサッカー選手の試合中のオーバーアクションにも見られます。あそこまでやるのとさすがに大げさでしょうが、中南米選手の身振りには、日常生活と共通したものも含まれています。



ついでながら付け加えておくと、人と話す時の態度そのものにも違いがあります。一つは声の大きさ（明瞭さ）です。日本語で話す時のようにぼそぼそしゃべっていても、スペイン語圏の人たちに見向きもされないことすらあります。明瞭な声ではっきり言いたいことを述べなければなりません。また、控えめに自分の意見を言わずにいると、どんどん話は進んでいって、気がついたら自分の望まない事態になっていた、なんてこともあり得ます。つまるところ、このコラムの冒頭で触れたような「語学力」があっても、態度が日本語の時のままでは、なかなか自在に会話に加わったり人間関係を構築できなかったりするわけです。

個人的な話ですが、先日（2010年3月）、メキシコ州立大学院大学（El Colegio Mexiquense）というところで講演をしてきました。後で知ったのですが、その講演の様子はインターネット上で誰でも見られるようその大学のサイトから発信されていました。話した内容はすぐ忘れてしまうという何とも都合のいい性格をしていますので、もしかしてとんでもない失言をしていないだろうかと思いつつ、恐る恐る自分でもその配信映像を確認してみました。すると、講演も終盤に差し掛かって熱がこもってくると、手がメキシコ人のように動いているではありませんか！ ふだんからジェスチャーや振る舞いを意識していたので、その成果が無意識に出ていたということなのだろうと我ながら妙に納得してしまいました。

「語学力」というと、「伝える内容（単語・表現・文法など）」しか意識しない人もいますが、「伝える音（わかってもらえるよう正しく発音すること）」も大事です。しかし、今回のこのコラムに書いた「伝える方法（身振り手振りや話に参加するタイミングなど）」も同じくらい大事です。今まで気にしていなかった人は、そういう側面があるということも意識しながら、外国語での会話・意思疎通に頑張ってほしいと思っています。



* 写真はいずれもメキシコ市内の光景です。

(2010.07.15)

外国に滞りて、言葉の勉強をしてみたいけれど、お金がない、と嘆いている人、また、以前行った国にもう一度行きたいけれど忙しくて無理、とあきらめている人、その国の、あるいは町の新聞を読むといいですよ。インターネットのおかげで、世界各地の新聞が手軽に、しかもたいていは無料で読めるようになりました。

私は以前イギリスのランカスターという田舎町に3年ほど住んだことがあるので、時々そのローカル紙、Lancaster Guardian という新聞をのぞいたりします。すると、「市の職員、公衆トイレの管理費と称して税金無駄遣い」（2010年5月20日）なんていう瑣末な記事があったりして楽しめます。昔住んだ場所の近所の写真が出ていたりすると、「全然変わっていないなあ。」と懐かしい思いがします。



ランカスターの公園



ランカスターの街

また、日本での出来事が海外でどのように報道されているのかを知るのも興味深いことです。沖縄のアメリカ軍基地移設問題はアメリカの新聞でも報じられていますが、その論調は実に様々です。The New York Times (2010年4月25日)では「鳩山首相の努力は今までのところワシントンを満足させるものではない。…首相が、長きにわたって日本の保護者であるアメリカと関係をうまく結べていないので、内閣支持率は30%を下回っている」と、かなり高飛車です。一方Los Angeles Times (2010年5月6日)では「アメリカは、基地問題における論争で、日本との協調関係を失おうとしている。…日本を屈辱的な立場に追い詰めている、アメリカ政府の高慢な態度は実に嘆かわしい。…アメリカは威張るのをやめて、65年間我慢してくれた沖縄の人々に感謝するべきではないのか。」といった沖縄に同情する記事を載せています。

まじめ一辺倒な日本の大手新聞と比べると、イギリスの新聞などは高級紙でも、ユーモアが感じられます。今年5月、パリ市立近代美術館から、厳重な警備をかいぐって、ピカソ、マチス、モジリアニの作品を含む名画5点が盗まれる事件がありましたが、その事件を報じるイギリスのThe Timesの記事の見出しは「『ピンク・パンサー』、8500万ポンドの名画を小脇に抱えて逃亡」です。そのあと、「美術愛好家のパリ市長(“art-loving Mayor of Paris”) ベルトラン・ドラノエ氏から昨夜ちょっとした説明があった。マスクをかぶった男が、パリ現代美術館に忍び込んで5点の傑作をお持ち帰りになった(“helped himself to five masterpieces”)のだ。」と記事が続きます。ユーモアと皮肉にクスッと笑ってしまうでしょう。



パリ市立近代美術館

Wikipediaより転載*1

残念なことに、あちらこちらの新聞がタダで見られる時間もそう長くはないかもしれません。数多くのイギリスやアメリカの新聞社、テレビ局を買収してメディア界を牛耳っているルパート・マードック氏が昨年の12月にオンラインの新聞を有料化すると宣言したのです。彼の傘下にあるアメリカ流経済紙のThe Wall Street Journalや、上にあげたイギリスのThe Timesなどのオンライン版が有料になるのは時間の問題と思われます。そうなれば他社の新聞も追隨して有料化していくことでしょう。海外の新聞が見放題の今のうちに、たくさん読んで、たくさん情報を蓄えておきましょう。

1. Copyright(C) 2007 [Pline](#), 2010 Senshu University.

This image under the terms of the [GNU Free Documentation License](#), Version 1.2 or any later version published by the Free Software Foundation.

Original Image: <http://en.wikipedia.org/wiki/File:Palais-de-Tokyo.jpg>

(2010.06.15)



カルトのお話を少し、といっても、カルト宗教のことではなく、オカルトでもなく、またオタクのことでもなく、フランス語でcarte、英語だとcard、つまりカードのお話です。ちなみに、フランス語でもオタクのことはotakuといいます。

フランスでしばらく暮らすことになると、すぐに手元にカードが溜まっていっぱいになります。昔からフランスはカード社会と言われていますが、身分証明書から銀行のカード、交通機関のバス、図書館のカード、テレフォンカード、さらにはスーパーのお得意さまカードまで、とにかくたくさんのカードを使いこなしながら生活することになります。

フランスに行くときに絶対必要なのは、もちろん、パスポート。これがないとフランスに入れないどころか、日本を出られません。でも、無事にフランスまで辿り着いたとして、そこでしばらく生活する上で一番重要なカードは、滞在許可証 **carte de séjour** といわれるものです。三ヶ月以上の滞在であれば、必ず取得が求められます。でも、これを取るのは大変。まず、日本にいたときに大使館に行って、ビザなるものを取得することから始まります。次に、フランスに行ったら、今度は住んでいる場所の県庁レベルのお役所に向いて、いろいろな国から来ている人たちに混じって（これは結構面白い）エンエンと待って（これはとても腹が立つ）、なんとなく偉そうで無愛想なおばさん（これはちょっと怖い）に書類を提出（不備があると、また出直して一からやり直し。これはやっぱり悲しい）。それから待つこ



と一ヶ月ほど。その間に健康診断を指定の場所で受けなくてははいけなかったりしますが（ちなみに、パリではその際に撮った大判のレントゲン写真をそのままくれます。これは面白いような、恥ずかしいような、邪魔なような……）、ようやく手元に滞在許可証が（これはとても嬉しい!）……。最近は大学の招聘等でフランスに行けば、その事務所がまとめて代行してくれるので随分と楽になりましたが、個人で行けばやはり大変です。おまけに、フランス到着後一ヶ月以内に取得が義務となっているのですが、それに必要な住居証明をするときに、着いたばかりなのにその月の公共料金の支払い証明書が、銀行口座の証明を求められたりします。ところで、銀行口座を持つために要求される書類のひとつが、この滞在許可証ですから、さて、どうしたものか……。こうなると、交渉あるのみです。でも、どうにか滞在許可証を得てしまうと、パスポートを持ち歩く必要もないですし、あとは比較的スムーズです。駅で、道でお巡りさんと目があっても平気です。



次に生活に必要なのは、銀行のカードでしょう。フランスでのお買い物に、カードは欠かせません。昔は小切手もよく使っていましたが、今はもっぱらカードです。ちなみに、小切手を使うときには身分証明書の提示が求められますから、滞在許可証が役立ちます。一番使いやすいのは、口座のある銀行で発行してもらう、カルト・ブルー・ナショナル **carte bleue nationale** と呼ばれる青いカードで、日本では例えば銀行のキャッシュカードみたいな感じです。ちなみに、三色旗のトリコロールのひとつである青は、フランスのナショナル・カラーです。サッカーのフランス代表のユニフォームはブルーで、新聞の見出しに **les Bleus** とあれば、それは普通、このナショナル・チームのことを指します。カルト・ブルーはお金の引き出しの限度額が日本よりもはるかに低い点が不便ですが、普段のお買い物にはこのカードを使



うのが一番簡単ですし、カフェでも郵便局でも、たいいていところで少額から使うことができます。駅の自動券売機などはお札を受け付けないものも多々ありますから、このカードがないと、むしろ不便です。わたしはフランスの銀行に口座を開いていてこのカルト・ブルーも持っているのですが、この間、現在のカードの期限が切れたから更新するよという案内が来たので、春休みに資料集めにパリに行った際に引き取ってきました。古いカードを返して、新しいものを受け取ったら……デザインが一新されていて、あまり青くない！ カルト・ブルーなのに！ 係のおじさんが笑いながら、「これはもうナショナルじゃなくて、ユーロ圏カードだよ、新しいんだ」と、自慢げに教えてくれました。ナショナル、つまりフランス国内からユーロ圏へと、銀行のカードの色も種類も変わったわけですね。



ギリシャの財政破綻など、今、ユーロは大きな問題を抱えています。その一方で、着々と広く流通するための土台も固めてきている印象を受けました。しかも、受け取ったらすぐに裏面にサインをするはずだったのに、もうサインは要らないと言われて、もう一度びっくり。長い間、ヨーロッパで個人のアイデンティティを支える根強い装置だったサインが、銀行のカードに不要の時代になってきたことは、何を示しているのでしょうか？ カードが電子化され、情報がすべて番号化、数値化されということなのでしょう。毎回違う文字になりそうでサインを書くのが苦手なわたしですが、それではなんだかちょっと寂しいような、そして怖いような気がします。

そしてこうなると、カルト・ブルーだけではなく、フランスに住んでいることを示すいわばナショナル・アイデンティティのための滞在許可証も、近い将来にはユーロ圏の、つまりはヨーロッパ共通の滞在許可証になるのでしょうか？ そうなれば、どこの国で滞在許可証を取得するのが一番簡単か、きつといういろいろな情報が飛び交うことだと思います。もっとも、お役所の仕事の能率性から見て、フランスが滞在許可証取得に苦勞する国のひとつであり続けることだけは、間違いないでしょうが……。



【第8回】 Experiences with and Observations on English Use While Traveling

文学部准教授 フリックマン, ジェフリー C. (英語担当)
Jeff Fryckman, Assoc. Professor, English Dept.



I feel I am very fortunate, in two ways. The first is that my occupation allows me ample time for personal travel abroad, and also, many opportunities to travel for my work. The second is that I am a native English speaker and English is, for the time being, the language of international business, travel and academia. This allows me to travel almost anywhere with very little difficulty and enjoy great experiences. I have noticed many interesting things during my travels concerning the use of English in various countries and places. Let me share some of my observations and experiences with you. Before starting, I must say that I am always impressed by the people I meet who can speak English as a second language, and I feel indebted to them for using my language in communicating with me.



A few years ago, I was lucky enough to go yachting with a French friend in Croatia. The coastline there, with its many small islands, crystal-clear blue waters, and quaint Venetian towns was absolutely gorgeous. I was also impressed by the widespread use of English there. I had expected that, being a former part of Yugoslavia and a little bit of a backwater in Europe, that people's English skills would be

limited. However, I was very impressed by the level of English that many people could use, and they were not only people in the tourist industry, but also regular people—supermarket cashiers, taxi drivers, the police, and even children.



A funny incident occurred while in one of the small port towns we stopped at. My French friend, who had studied Italian specifically for making this trip—thinking it more useful in Croatia than French or English (he is a fluent English speaker)—asked a policeman for directions to a restaurant in Italian. The policeman tried to reply in Italian at first, but could not do so adequately, and so, in frustration, asked my French friend rather abruptly, "Can't you speak English?" He and I were both shocked, but for very different reasons—he, because he had thought Italian to be a better choice, and I, because I had realized how universal English was becoming.

Also, in the various ports where we stopped each night, there were yachts from many different countries with speakers of many different languages on them, but English was definitely the lingua franca of the yachting world there. The harbor employees used it when helping people to dock their yachts, at all facilities at the harbors, and even when talking to each other. Every night, people joined each other for dinner or drinks aboard each other's vessels, and used English as the language to communicate with one another over fine wines and excellent seafood. It was both fascinating and impressive to hear Germans, Italians, French, Russians, Spaniards, and Croatians, among others, all laughing and conversing so easily in my native language.



On a different trip, to China, I was impressed by the use of English, but in a slightly different way. In this case, it seemed to me that English was mostly being used for business and commerce.

In hotel lobbies and restaurants, I saw many instances of Chinese business people talking with Europeans, Arabs, Latin Americans, and other Asians, all using English to conduct their business. It was interesting to watch them discuss and negotiate in English, and see them use gestures, facial expressions, and sometimes drawings to assist their communication. It made me realize how fast China is integrating with the rest of the world, how much of the world's business is conducted in English, and what an important tool English is in the business world.



For similar purposes, but on a different scale, English is also used in the streets of China to conduct commerce. Almost every minute of the day, hawkers and shop owners tried to sell me something, usually starting with "haro, haro" (hello). The various levels of English skill employed in trying to get me to buy their wares were quite interesting, ranging from simple phrases and sentences like "You buy? You buy? Very cheap!" and "I give you good price!" to very humorous and sophisticated tactics, such as "Come on in. I'm only gonna rip you off a little." It seemed that everywhere I went, even atop the Great Wall in a remote area, that constant and aggressive sales pitches

were aimed at any and all tourists.

All of this reminds me how powerful a tool for communication and commerce English has become, and how fortunate I am to be a native speaker, and how lucky I am to be a teacher of English, so that I can share this useful tool with others.



On a different note, I have also had some interesting experiences with the language while traveling in English-speaking countries. It was amazing to find out that even amongst native speakers, problems and miscommunication can often occur.

For example, I have traveled to the UK for work—chaperoning students or attending conferences—several times, and when I was in the north or west of the country I sometimes had trouble understanding the local people. The accent was very different from standard British English, and even some vocabulary was different. One example of a difference in vocabulary occurred when I returned my rental car. The agent asked me to park on the "pavement," which to me meant the asphalt in the street, but for him meant the "sidewalk." Thus, I parked in the wrong place, and he had to go out and move the car so that it would not be ticketed.



Due to my inability to understand some things, I sometimes had to ask people to repeat what they said. I was embarrassed to have to do so. Most people were very kind about replying, though I could tell that a few were slightly perplexed or even a little irritated at having to do so. In addition, it seemed no one really had any trouble understanding me. I was surprised by this at first, but then I realized that it is likely due to the availability of American movies and TV programs in England. I felt a little ashamed by this imbalance in exposure and my inability to catch what people said right away. I started to apologize each time I had to ask for clarification, but one of the local students told me not to worry about it, as even Londoners had trouble understanding him. This made me feel better, and it also made me realize that English is a rich and varied language, and that as a teacher, I must strive to learn as much about these differences as I can.



One other example happened when I was in San Antonio, Texas attending a conference. One day I went into a deli to buy some lunch. I was the only customer in the shop, and when I approached the counter to order, the older woman behind the counter said, "How y'all doin'?" (How are you all doing?) to me. I think she could tell by the look on my face that I thought "y'all" was a bit strange and that it referred to more than one person for me. Thus, she said to me in a humorous tone, "Son, let me give you a grammar lesson. Y'all is singular, and all y'all is plural, and don't forget that." I laughed and thanked her for the lesson on proper English in Texas.

As you can see from the above, I have had many interesting experiences concerning the use of English while traveling, and while using it to communicate with people in different places. I hope that you enjoyed reading about these. If you are a student of English, I hope that you will continue to study hard and to raise your skill levels so that you too can benefit from being able to use the language to travel or to meet new people, or to possibly use in your future career.

(2010.04.15)



専修大学LL研究室 (<http://www.senshu-u.ac.jp/libif/llid/>)
〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
TEL:044-911-0502 FAX:044-900-7842

HOME | プライバシーポリシー

Copyright(C) 2000-2014 Senshu University All Rights Reserved.